

女性医師と  
女性スタッフが  
中心となり、  
最適な医療を推進

## 金沢医科大学病院が 女性総合医療 センターを開設

金沢医科大学病院は平成二十一年四月、女性総合医療センターを開設した。同病院は平成十五年に石川県内の医療機関に先駆けて女性外来を運営してきたが、その機能をさらに強化し、女性患者がより利用しやすい受診窓口とすることを目的に、女性外来を「女性総合医療センター」に拡充した。金沢医科大学病院の新しい取組みを取材した。

柏野隆弘=取材  
水野直樹=写真

「性差医療」の  
観点を導入し、  
最適な  
医療サービスを提供

金沢医科大学病院の女性総合医療センターは、医師をはじめとするスタッフのすべてが女性で構成される女性専用の診療窓口である。受け付ける症状の種類は問わず、診療は完全予約制で一人三十分たっぷり時間を取る。そうした配慮によって女性患者の不安を取り除き、男性医師ではなかなか聞き出せない悩みや症状の診療にあたっている。そのうえで、総合的な観点から最適な治療方法を決定し、



金沢医科大学病院  
女性総合医療センター コーディネータ  
鈴鹿有子教授

必要に応じて専門の診療科へ橋渡しをする。

訪れる患者の病態は、高血圧症や糖尿病といった生活習慣病から更年期障害やうつ、不定愁訴など多種多様であり、集学的医療の代表的領域といえる。そのため、診療にあたる女性医師には、ジェネラリスト（総合医）と同時に女性の心と身体のスベシヤリストであることが求められる。

金沢医科大学病院は平成十五年に県内の医療機関に先駆けて女性外来を開設し、数多くの女性患者から厚い信頼を得てきたが、女性総合医療

## 女性特有の ニーズに きめ細かく応える 多様な機能

センターへの拡充に伴い、従来に比べて、女性の医師、スタッフが大幅に増員され、診療の窓口機能が強化された。同病院は各診療科との連携をいっそう緊密にすることで、より質の高い総合的医療サービスを目指していく。

「女性の生涯にわたる健康のサポートをめざす」基本コンセプトを掲げる女性総合医療

療センターは、単に女性医師が初診患者を診るだけでなく、女性患者の多様なニーズに対応するための多くの機能を有している。

同センターでコーディネータを務める鈴鹿有子教授はその機能についてこう説明する。

「女性総合医療センターの役割には『女性の不調全般の窓口』としての機能のほかに、カウンセリング、内科的治療の大きく三つの機能があります」。

鈴鹿教授によると、カウンセリングはうつや不定愁訴といった心の不調への対応にとどまらない。身体の不調が心理的な原因に根ざす場合が女性患者には少なくなく、心の問題の解決なくしては病気の治療に結びつかないため、カウンセリングが極めて重要になる。内科的な治療には、身体医学、心身医学、さらには漢方治療やアロマテラピーが含まれ、併せて栄養学に基づいた食事指導や運動指導による生活改善も促している。

## 意識改革も含めた 「患者中心の医療」 を目指す

女性総合医療センター開設の背景には、性差医療（gender-specific medicine）への関心の高まりがある。

従来の診断方法や治療方法の多くは成人男性のデータを基に確立されてきたものであり、現在の医療は、男女の性差を十分考慮したものとは言い難い状況にある。一方、遺伝子やホルモンといった身体的な要因、あるいは社会や家庭での役割の違いにより、疾患の発症や経過に大きな男女差が認められるとして、米國を中心に一九八〇年代から、性差を尊重した医療の重要性が叫ばれるようになってきた。これが性差医療である。この動きに呼応して、近年、女性医師が働く環境の整備や女性医師を育てる医療教育の立ち遅れも指摘されるようになってきた。

「女性総合医療センターは、そうしたいわば男性中心の医療のあり方を見直し、医療サービスを受ける側、提供する側双方の女性に優しい医療を目指すものです」。こう話す鈴鹿教授によると、同センターの行動指針は四本の柱から成り立っている。

第一の柱は、平成十五年に設置した女性外来と各診療科との連携だ。女性総合医療センターは、単に女性患者が訪れやすいというだけでなく、女性にとって最適な医療のための中核をなす部門と位置づけられている。

第二の柱は女性医師の支援



医師スタッフ全員が女性で構成される金沢医科大学女性総合医療センターは、性差医療の考えに基づいた集学的医療を展開する



## Interview

金沢医科大学病院  
女性総合医療センター  
副センター長

赤澤純代 助教

# 女性患者の願いや 生きがいをも含む 多面的な サポートを展開

女性総合医療センターが重視しているのは、女性のライフサイクルと健康の関係です。女性の一生は女性ホルモンに支配されていると言われるほど、加齢とともに変化するホルモンの働きによって女性の心と体が大きな影響を受けます。そこで当センターでは、女性ホルモンをコントロールする低容量ピル(OC)の使用と女性ホルモン補充療法(HRT)を組み合わせ、女性のライフステージの変化に

合わせたホルモン療法を行うことで大きな効果を上げています。女性の生き方と健康は、深く結びついています。個々の女性が精神的に自立し、ライフプランを持つことが大切です。そのためには、一人ひとりの女性が自分のライフスタイルを見直し、一生を通じた生きがいを見出すことが大きなテーマとなります。

「いつまでも美しくありたい」とする願いも女性の生きがいに欠かせない要素です。当センターでは、アンチエイジングの視点も含め、女性の心と身体の悩みに取り組んでいます。さらには社会における女性のあり方が女性の健康に深く関係しているとの視点から、当センターではNPO法人女性医療ネットワークや石川県女性センターでの講演などを通じて、医療の現場から男女共同参画社会の実現に向けた情報発信も積極的に展開しています。

だ。医師不足の要因の一つに女性医師の出生、育児による離職が挙げられる。ここ十年来、女性医師の数は増加しているが、その多くが子育て世代であることから、キャリアと育児の両立が懸案となっている。金沢医科大学病院には、出産・育児後の復帰者も含め百七名の女性医師が勤務し、病院全

体の医師の三割を占めている。この数字は全国平均の二倍に迫るものだ。今後も、女性総合医療センターを通して、女性医師が女性としての誇りを持って働き続けていける環境の整備に力を入れていく。

第三の柱は女性医師を育てる医学部教育だ。医師を目指し全国から金沢医科大学に集まった女子学生の学部全体に占める割合は四割(平成二十年卒業時)を超える。専門領域の知識に加え、性差や男女参画といった幅広い視点を持った女性医師を育てることも、同センターの役割の一つだ。

第四の柱は一般市民への啓発活動だ。同大学の基本理念でもある「患者中心の医療」を実現するためには、患者の側にもこれまでの「受け身の医療」意識からの脱却が求められる。そうした観点から女性患者が主体的な意識を持つよう情報発信や啓発活動を進めている。

鈴木教授は、「四本柱は互いに深く関わり合っており、それぞれが相互に作用し相乗効果を上げている。」「女性の生き方と健康は、深く結びついています。個々の女性が精神的に自立し、ライフプランを持つことが大切です。そのためには、一人ひとりの女性が自分のライフスタイルを見直し、一生を通じた生きがいを見出すことが大きなテーマとなります。」と意欲的だ。